

店舗建築に伴う埋蔵文化財発掘調査業務

大槻城跡(城の内遺跡)

——第4次発掘調査報告書——

令和5年5月

郡山市教育委員会

店舗建築に伴う埋蔵文化財発掘調査業務

大槻城跡(城の内遺跡)

——第4次発掘調査報告書——

令和5年5月

郡山市教育委員会

店舗建築に伴う埋蔵文化財発掘調査業務

大槻城跡(城内遺跡)

——第4次発掘調査報告書——

令和5年5月

郡山市教育委員会

店舗建築に伴う埋蔵文化財発掘調査業務

大槻城跡(城の内遺跡)

——第4次発掘調査報告書——

令和5年5月

郡山市教育委員会

序 文

郡山市は、福島県のほぼ中央に位置し、豊かな自然に恵まれ、その地理的特徴から、原始・古代より交通の結節点として東西南北から、さまざまな地域の文化が集まり、それらを礎として多様な文化が形成されてきました。

文化財は、地域の歴史や文化を理解する上で欠くことのできないものであり、地域文化の向上・発展の基礎となるものであります。その中でも、埋蔵文化財は大地に刻まれた地域の歴史そのものです。

郡山市教育委員会では、本市の歴史や文化を解明する貴重な財産である埋蔵文化財を後世に遺し、継承していくことが現代に生きる私たちの大きな責務であるとの認識のもと、埋蔵文化財の保存と活用に努めているところであります。

大槻城跡は、郡山市立大槻小学校を中心とした範囲に位置する中世の城館跡で、築造時期は不明ですが、16世紀には大槻伊東氏の城としてありましたが、蘆名方や伊達・田村方との戦いで落城したとされています。これまでに、3度の発掘から堀跡や平場が確認されているほか、縄文時代、古墳時代の住居跡が確認されています。この度、遺跡内での店舗建築に伴い、記録保存のための発掘調査を実施し、消失してしまう土塁や堀跡の調査から、より正確な城跡の復元が可能となったことは、今後も続いていく調査の助けとなる成果であります。

本書は、発掘調査の成果を周知し、活用できるように後世に残す記録としてまとめたものであります。今後、地域の歴史解明の基礎資料や研究資料として、広く皆様に活用していただきますとともに、埋蔵文化財の保存と活用について御理解をなお一層深めていただければ幸いに存じます。

結びに、発掘調査実施から報告書作成にあたり、御尽力を賜りました矢田部文丸様をはじめとする関係各位に敬意を表しますとともに、心から感謝を申し上げ序文といたします。

令和5年5月

福島県郡山市教育委員会
教育長 小野 義明

調 査 要 項

遺跡名・次数 大槻城跡(城の内遺跡)・第4次
所在地 福島県郡山市大槻町字殿町
契約期間 令和5年1月4日～令和5年5月31日
発掘調査期間 令和5年1月4日～令和5年2月15日
発掘調査面積 235㎡
調査委託者 矢田部文丸
調査受託者 郡山市
調査主体者 郡山市教育委員会
調査担当者 公益財団法人郡山市文化・学び振興公社
事務局 郡山市文化スポーツ部文化振興課文化財保護係
主任技術者 垣内和孝(公益財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センター所長)
業務従事者 安齋一十三 今泉淳子 垣内和孝 加藤志津佳 関根寿夫 塚原譲 橋本志津
山田秀和 吉田イチ子

例 言

1. 本書は、福島県郡山市大槻町に所在する大槻城跡(城の内遺跡)の記録保存を目的とした第4次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理報告に関わるすべての費用は矢田部文丸が負担した。
3. 本書は、公益財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センターが編集し、郡山市教育委員会が発行した。
4. 本書の執筆は、1を郡山市文化振興課文化財保護係の荒木麻衣、2～6を垣内和孝が行なった。
5. 遺構図の作成は垣内和孝・加藤志津佳・橋本志津・吉田イチ子が行なった。
6. 遺物図の作成は垣内和孝・今泉淳子が行なった。
7. 遺構・遺物の写真は垣内和孝が撮影し、空中写真撮影は日本特殊撮影株式会社に業務委託した。
8. 表土の掘削及び調査区の埋め戻しには重機を使用し、業務は株式会社市川建設に委託した。
9. 本書第1図は、基図として国土地理院発行1/25,000地形図「郡山西部」を使用した。
10. 本書第2図は、基図として1/2,500県中都市計画図を使用した。
11. 座標値は、世界測地系平面直角座標第IX系を使用した。
12. 調査に関わる記録・資料および出土遺物は郡山市教育委員会の保管である。
13. 本書の作成にあたり、以下の組織・個人の協力・助言をいただいた。
大槻郷土史会 諸越裕 柳沼賢治(順不同・敬称略)

目 次

序 文

調査要項

例 言

目 次

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過と方法	1
3. 大槻城跡（城の内遺跡）の概要と大槻城の縄張	2
4. 遺 構	5
5. 遺 物	13
6. ま と め	18

参考文献

写真図版

報告書抄録

1. 調査に至る経緯

埋蔵文化財包蔵地の大槻城跡地内で店舗建築の計画の相談があり、平成30年に一部試掘調査が実施されていたが、より詳細な情報を得るため、郡山市教育委員会は、令和4年4月25日から27日に対象となる開発区域1,545.79㎡に、トレンチを6本設定し、調査面積79.24㎡の試掘調査を実施した。調査の結果、現表土面から30～80cmの深さで、竪穴遺構や土坑、ピットを検出し、土師器片や須恵器片などが出土した。そのため、調査範囲の1,545.79㎡を要保存範囲と判断した。

その後、事業地の埋蔵文化財の保護・保存について、協議が持たれ、工法変更等による現状保存が困難であると結論に達し、記録保存を目的とする発掘調査を実施することで合意に達し、遺跡の保存が不可能となる範囲235㎡の発掘調査を実施することとした。これを受けて、大槻城跡第4次調査及び発掘調査報告書作成において、令和4年12月19日付けで矢田部文丸氏と郡山市との間で委託契約が、令和5年1月4日付けで郡山市と公益財団法人郡山市文化・学び振興公社との間で委託契約がそれぞれ締結された。その後、寒波による屋外業務の遅延や多くの遺構・遺物の検出から履行期間の延長が必要となり、矢田部文丸氏より承諾を得て、変更契約を行い、令和5年5月31日までの業務となった。

2. 調査の経過と方法

調査対象地には大槻城を構成する土塁が残存していたため、1月4日と5日に土塁およびその周辺の地形測量を行なった。測量図は縮尺100分の1、等高線は25cmで作図した。同10日から13日にかけて、重機を用いた表土の除去を行ない、排土は調査区脇に仮置きした。この間の11日には、調査区際の土塁断面の人力での精査を開始し、この作業と並行して、13日には東側の小面積の調査区の精査および確認した堀の掘り込みを行なった。17日には西側の主となる調査区の遺構検出作業を行ない、翌18日には確認した遺構の掘り込みを開始した。その後、確認した遺構の掘り込みと実測図の作成、写真の撮影を順次実施した。これらの作業は2月6日におおむね終了した。遺構の検出および掘り込みは鋤簾・スコップ・移植篋を併用した。実測図は縮尺20分の1で作成し、写真は35mmカラーリバーサルフィルムとデジタルカメラでの撮影を併用した。翌7日には、日本特殊撮影株式会社に委託して、ドローンによる空中写真撮影を行なった。8日と9日に土塁ベルトの人力による除去と機材の撤収を行ない、14日と15日に重機で調査区を埋め戻して屋外の作業を終了した。

今回の第4次発掘調査区には土塁や造成層が存在したため、これを独立した土層として扱い、以下のように層序を設定した。LⅠ＝表土、LⅡ＝土塁・造成層、LⅢ＝黒褐色土層、LⅣ＝黄褐色土層（ローム質）、LⅤ＝黄褐色～黄白色土層（粘土質）である。LⅢは、平安～古墳時代を中心とした時期の遺物を包含する。LⅣ・Ⅴは地山層で、LⅣは部分的に小円礫を多量に含む。

1月30日には、発掘調査と並行して屋内での整理作業を開始した。水洗・注記といった基礎的な作業が終了したのは2月14日である。引き続いて接合・復元・実測および原稿の作成を進め、3月17日までは報告書の校正・印刷を除く作業を終了した。遺物の実測は原寸で行ない、写真撮影はデジタルカメラを使用した。

3. 大槻城跡（城の内遺跡）の概要と大槻城の縄張

大槻城跡（城の内遺跡）は、福島県郡山市大槻町の住宅街に所在する。郡山市の中心市街地からは、西方へ5 kmほど離れている。奥羽山脈に源を発する笹原川と逢瀬川に挟まれた台地上にあり、西から東へと続く微高地上に広がる。昭和55年に第1次、同57年に第2次・第3次発掘調査が行なわれ、縄文時代早期末葉と古墳時代中期～後期の集落がみつき、大槻城を構成する土塁や堀などが調査された。文献史料によれば、大槻城が機能したのは中世後期～近世初頭である。

大槻城の範囲は小学校の敷地や住宅地となり、遺構の多くは失われている。しかし、明治期に作成された地籍図を参照しながら現地を歩くと、地割や微地形などにその痕跡をとどめているのがわかる。大槻城を構成する曲輪群は東西方向に伸びる微高地上に展開し、南側は東流する壇経川で画される。第2図は、地籍図と研究史を参照しながら推定・作成した大槻城の曲輪配置と、これまでに実施した発掘調査の地点を示したものである。

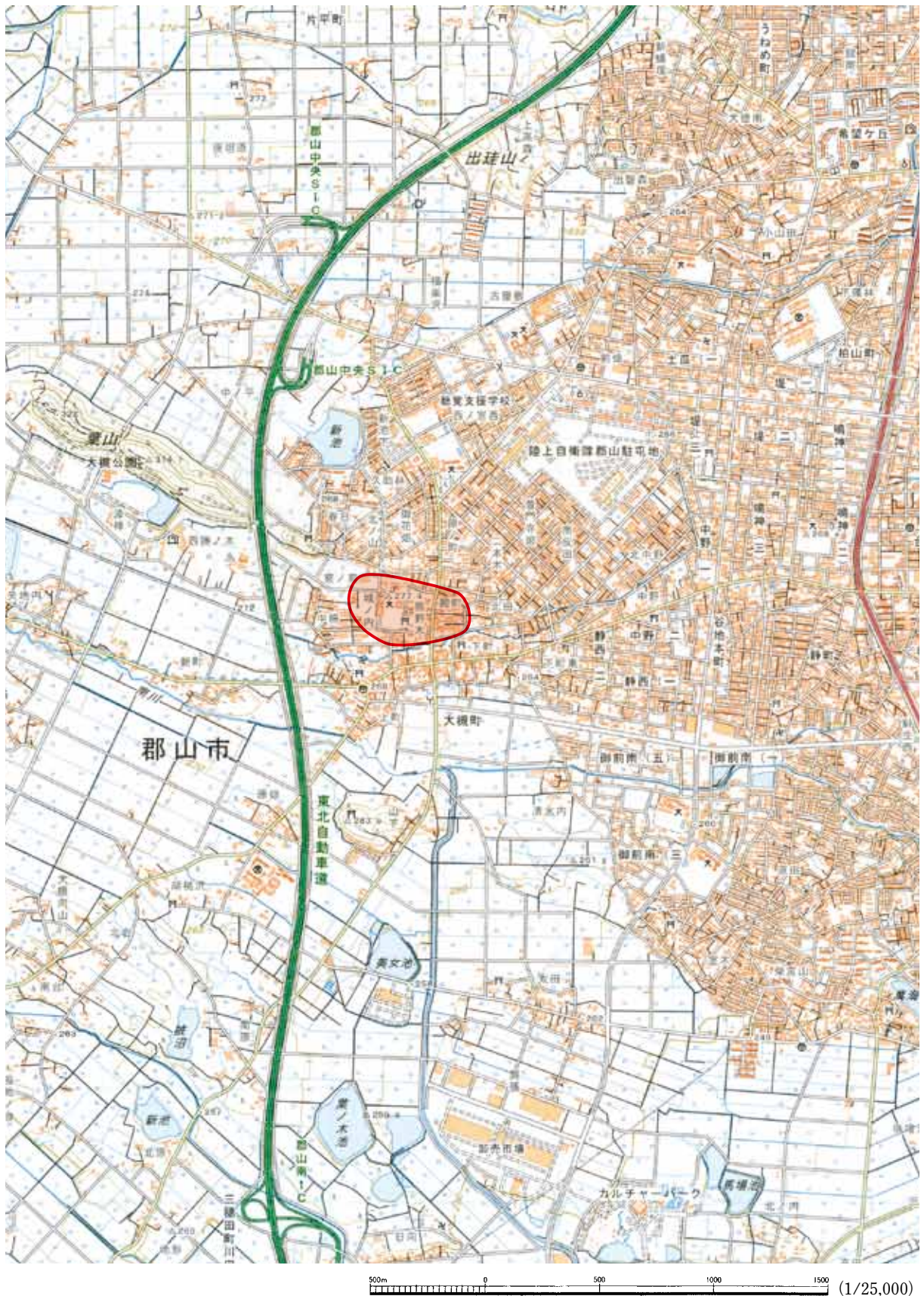
小学校の敷地となっているⅠとした部分が主郭（本丸）とみられ、一辺約90mの方形館である。その北側から東側にかけてⅡとした曲輪が取り付き、ⅠとⅡの南側にはⅢとした東西に長い曲輪がある。このⅠ～Ⅲの曲輪が、大槻城の主要部を構成する。Ⅰの西側にあるⅣとした曲輪は、主要部と同じ微高地上に乗っており、比較的古い段階から存在したことが想定できるものの詳細は不明である。

第1次・第2次調査において、主郭Ⅰを画する堀の一部がみつき、西辺の堀幅が21.5mであることを確認した。曲輪Ⅱに鎮座する槻元神社には、大槻という地名の由来になったとされるケヤキ（槻）の巨木がかつて存在した。その北側の東西方向の道筋は、主郭への登城路であった可能性がある。Ⅱの北辺を画する堀は二重となり、第3次調査ではそのうちの内側の堀幅が10mを超える規模であったことや、Ⅱの北辺に土塁の存在したことなどを確認した。二重堀の内側の堀がⅡの東辺に沿って屈曲するのに対し、外側の堀はまっすぐ伸びてⅤの北辺の堀となる。このような二重堀のあり方は、外側の堀が後から敷設されたもので、その契機がⅤの曲輪の新たな普請であったことを予想させる。

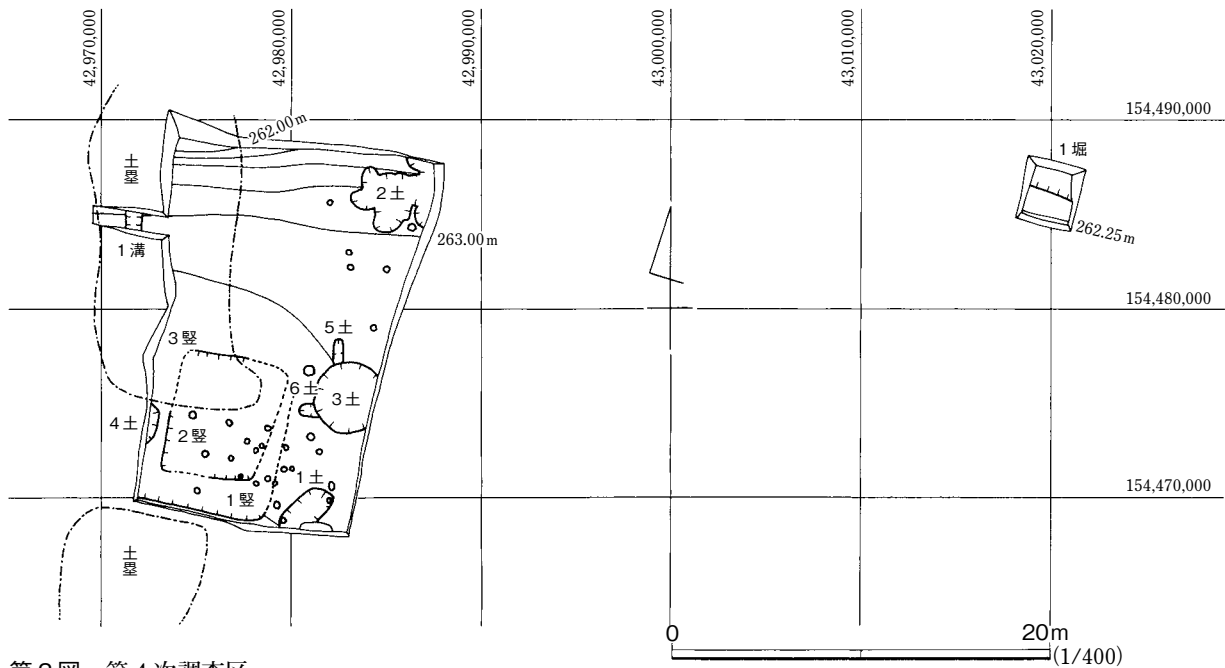
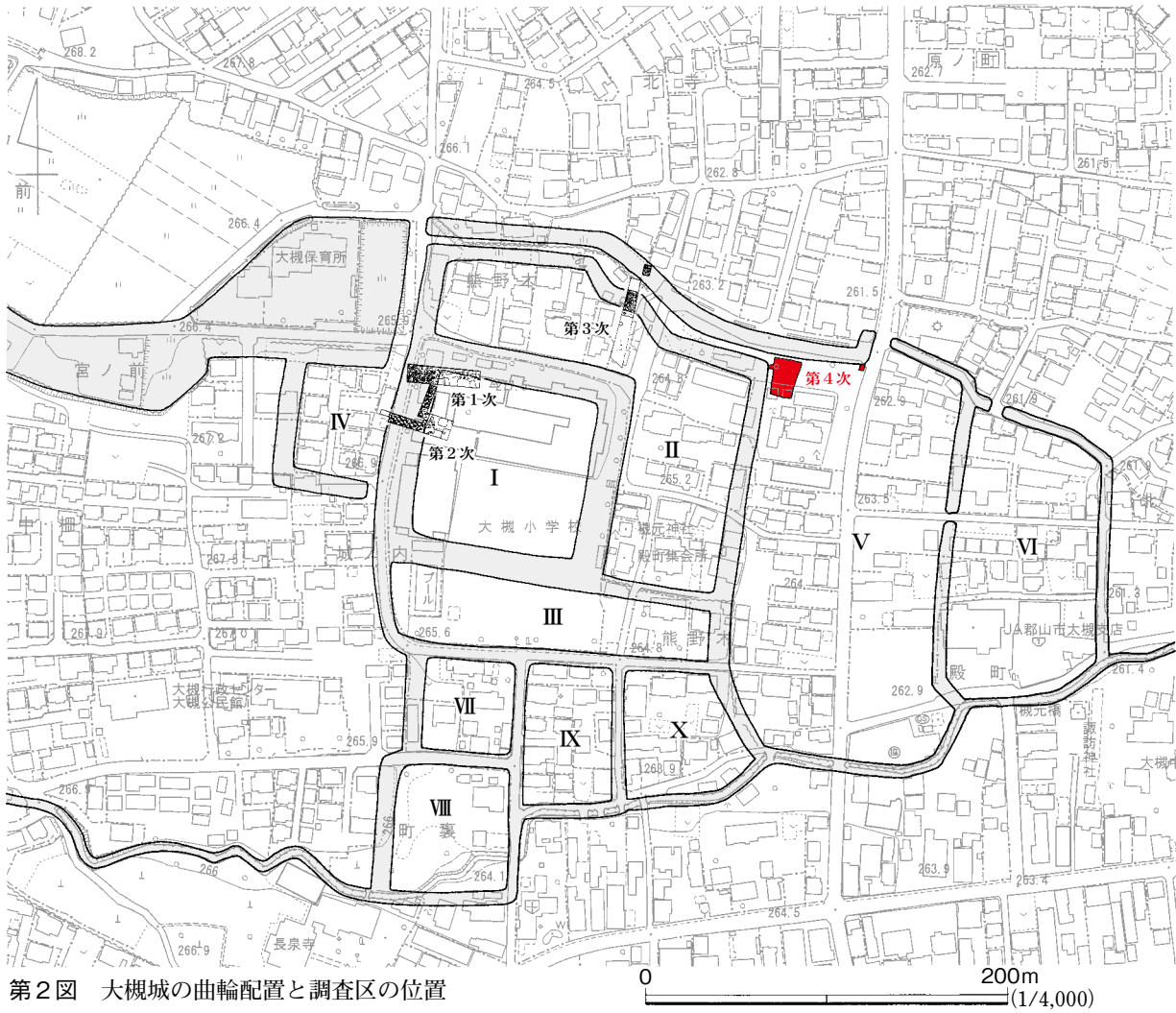
Ⅴは南北に長い矩形であり、北辺の中ほどが開口する。中央を南北方向の道が貫通していたとみられ、殿町の字名を重視すれば、城下を囲い込んだ区画の可能性もある。今回の第4次調査において、その北西出隅付近から北辺にかけて土塁の存在したことが確かめられた。Ⅴの東側に隣接するⅥとした曲輪も、その配置からⅤと一連の関連する区画と考えられる。

Ⅲの南側にあるⅦ～Ⅹとした曲輪は、規模は小さいながらも主郭Ⅰと同様な方形区画である。大槻城主に従った家臣層の屋敷地の可能性がある。曲輪を区画する堀は完全に埋没しているが、Ⅷの北辺と西辺の一部には土塁が残存する。

大槻城跡（城の内遺跡）の発掘調査は、ごく限られた範囲を対象とした部分的なものである。しかし、これまでに実施した第4次までの調査によって、大槻城の曲輪が展開する微高地上に、縄文時代から平安時代の集落が存在したことが確かめられた。古墳時代の集落は、前期から後期にかけて、空白期を含みながらも継続的に営まれ、特に後期は遺構密度が高いようである。付近には多くの古墳が存在しており、大槻城跡（城の内遺跡）の周辺が、古墳時代の中核的な地域の一つであったことがうかがえる。



第1図 大槻城跡（城の内遺跡）の位置



4. 遺 構

第4次調査で確認した遺構は、竪穴建物・土坑・ピット・堀・溝・土塁・造成層である。以下、遺構の種類ごとに概要を報告する。

竪穴建物 3棟重複して確認した。ただし、検出の段階では3棟が重複していることを把握できず、各竪穴の新旧関係は出土した土器によって後から判断せざるを得なかった。1号とした竪穴は、1辺が8メートルを超える大型のもので、竪穴と想定できる範囲および周辺から、25基の小穴（P）を確認した。これらの小穴には、1号だけでなく重複する2号・3号に帰属するものを含む。遺物が出土した小穴については帰属が想定できるものの、それ以外は判断が難しいため、小穴の番号は連番とした。1号は南辺のみ明確な段差として把握できた。北西の調査区際で確認した焼土面が竈の痕跡とも考えられるが、判然としない。2号は、1号竪穴内の床の段差として、南壁・西壁・北壁の一部が把握できた。床には2基の炉があり、羽口の細片と若干量ではあるものの鉄滓が出土したことから、鍛冶工房の可能性もある。P19上面出土の平石は、金床石かもしれない。3号は、1号の北西部でみつかったP20・22の存在から推測したが、規模や形状を捉えることはできなかった。よって竪穴ではないことも考えられる。出土遺物から、1号は古墳時代後期前半、2号・3号は平安時代前期とみられる。

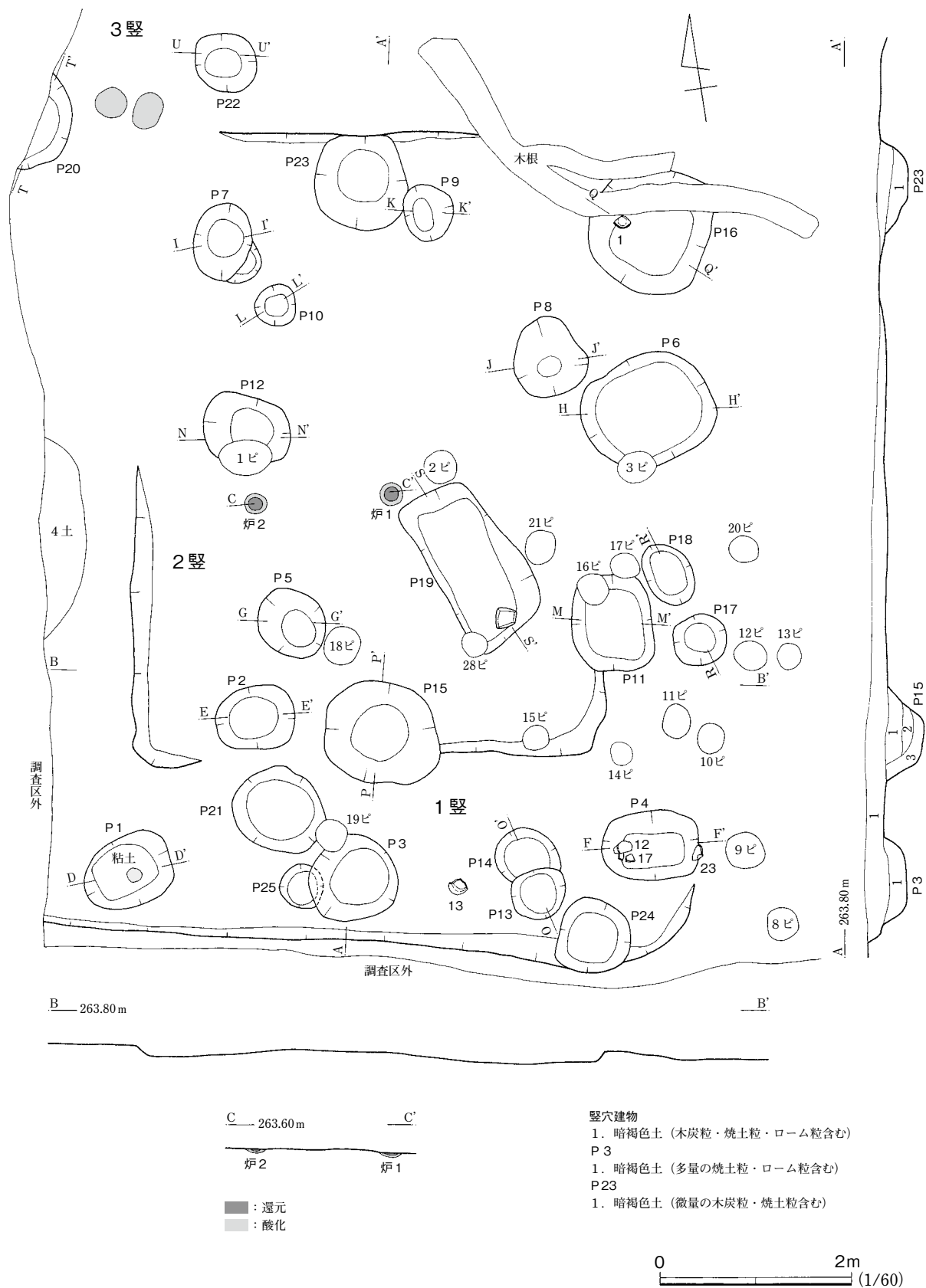
土坑 6基確認した。1号はごく浅く、壁の立ち上がりは緩やかである。人為的な掘り込みではなく、自然の窪みなどの可能性もある。2号は、複数の掘り込みの累積といった形状であるが、単独の土坑とした。3号は、平面が円形となる規模の大きなもので、人為的に埋められていた。4号も、平面が円形となりそうだが、大半は調査区外である。堆積土に顕著な焼土の混入がみられる。5号は、平面が長方形基調で、堆積土に沼沢パミスを含む。6号は、平面が長円形基調で、壁の立ち上がりは緩やかである。5号・6号は3号と重複関係にあり、平面観察により3号が新しいと判断した。出土遺物から2号・3号は古墳時代後期、4号は平安時代前期、堆積土の様相から5号は縄文時代前期以前とみられる。

ピット 29基確認した。1～4号は東西に並んで柱列となる。ピットはこの柱列の南側に偏在し、北側で少ない。竪穴建物・1号土坑と重複関係にあり、いずれの場合もピットが新しいと判断した。

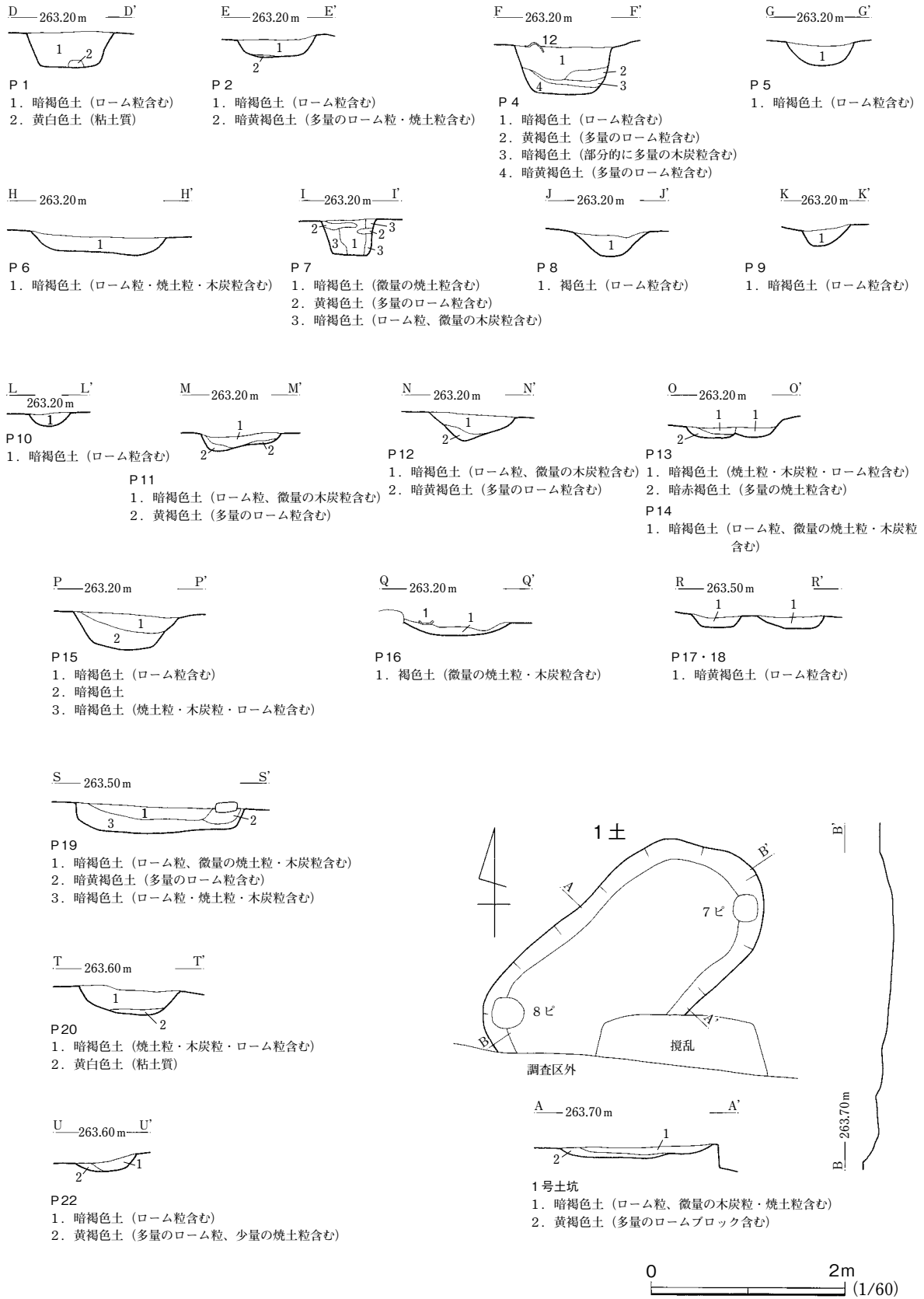
堀 第4次調査区のある曲輪の北辺を画する堀の南側上端を確認した。聞き取りによれば、北側の舗装道路が敷設されるまで、この堀は開口し、堀底面は田として利用されていたらしい。上層の堆積層には、ビンや缶などといった現代の廃棄物を含む。

溝 土塁の下層で確認した。後述する土塁を断ち割ったサブトレンチで部分的に確認したのみだが、曲輪の縁辺に土塁と並行して続くと考えられる。溝の堆積土と土塁の積土とは一連の堆積状況を示すように見受けられ、土塁の基礎構造に関わる遺構の可能性もある。

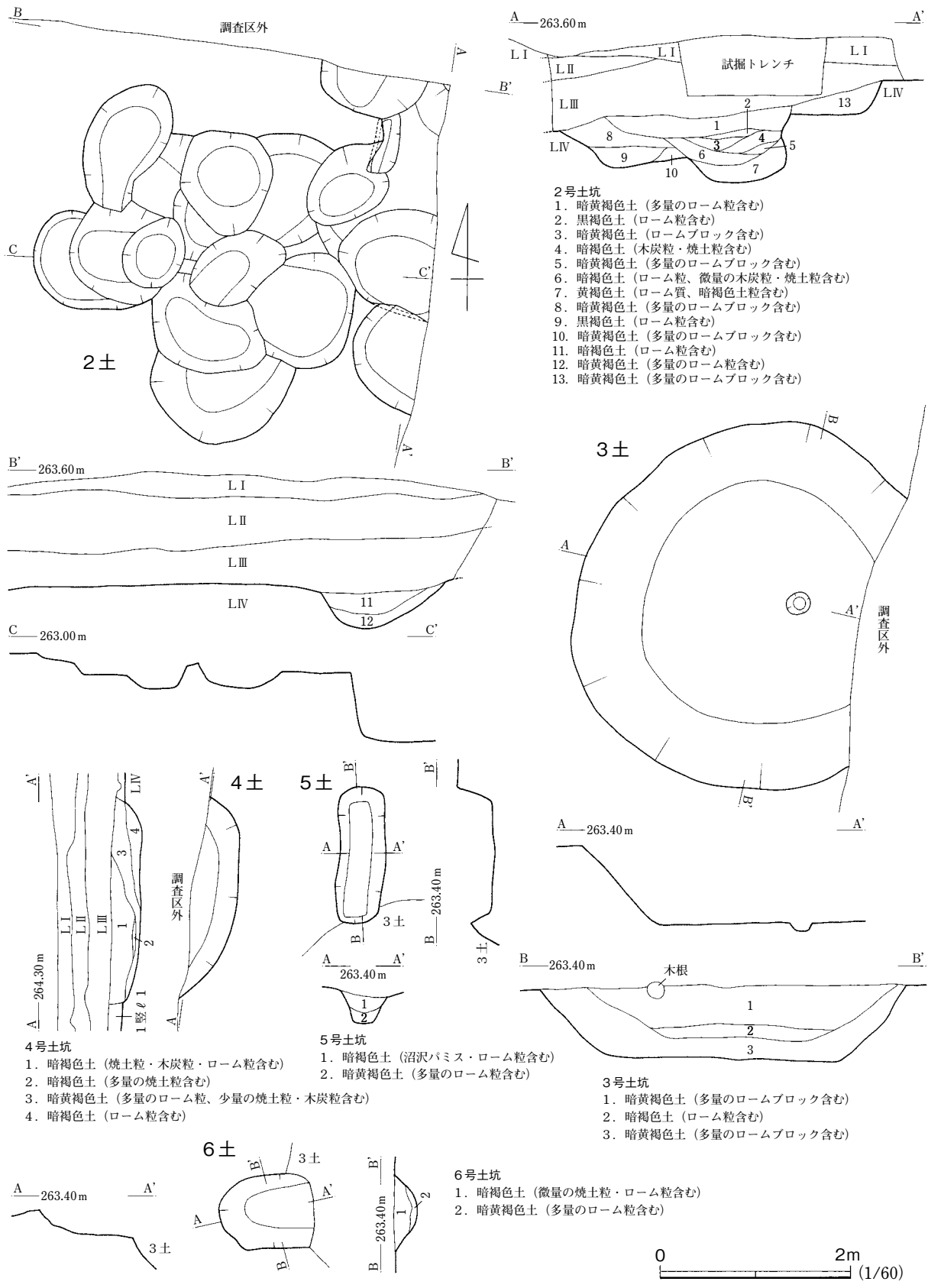
土塁・造成層 曲輪の西辺土塁が一部残存し、平面の地形測量と断ち割り調査を行なった。土塁は途中で途切れるが、この部分は後世の破壊である。土塁の傾斜は西の堀に面する外側で急角度、東の曲輪に面する内側では緩やかである。当該地はもともと北に傾斜する地形だったようだが、その部分を造成して平坦面を広げ、その上部に土塁を構築したようである。曲輪北辺の現況は、西側を中心にスロープ状に削り取られていたが、本来はこの部分にも造成層があり、その上部に土塁が乗っていたと思われる。



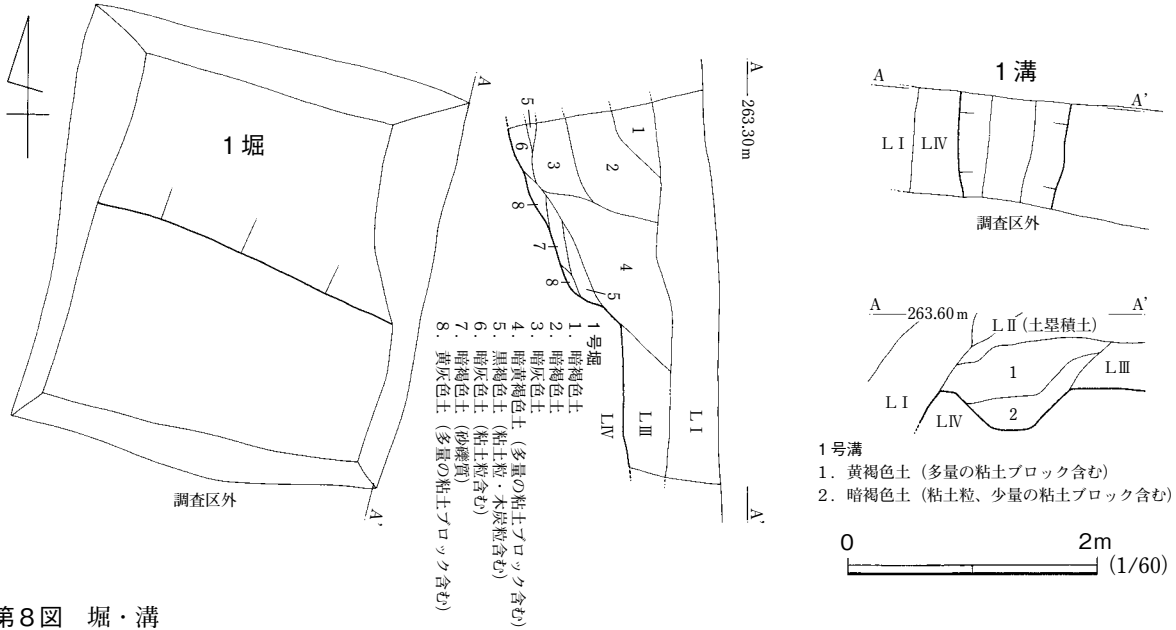
第4図 1～3号竪穴建物



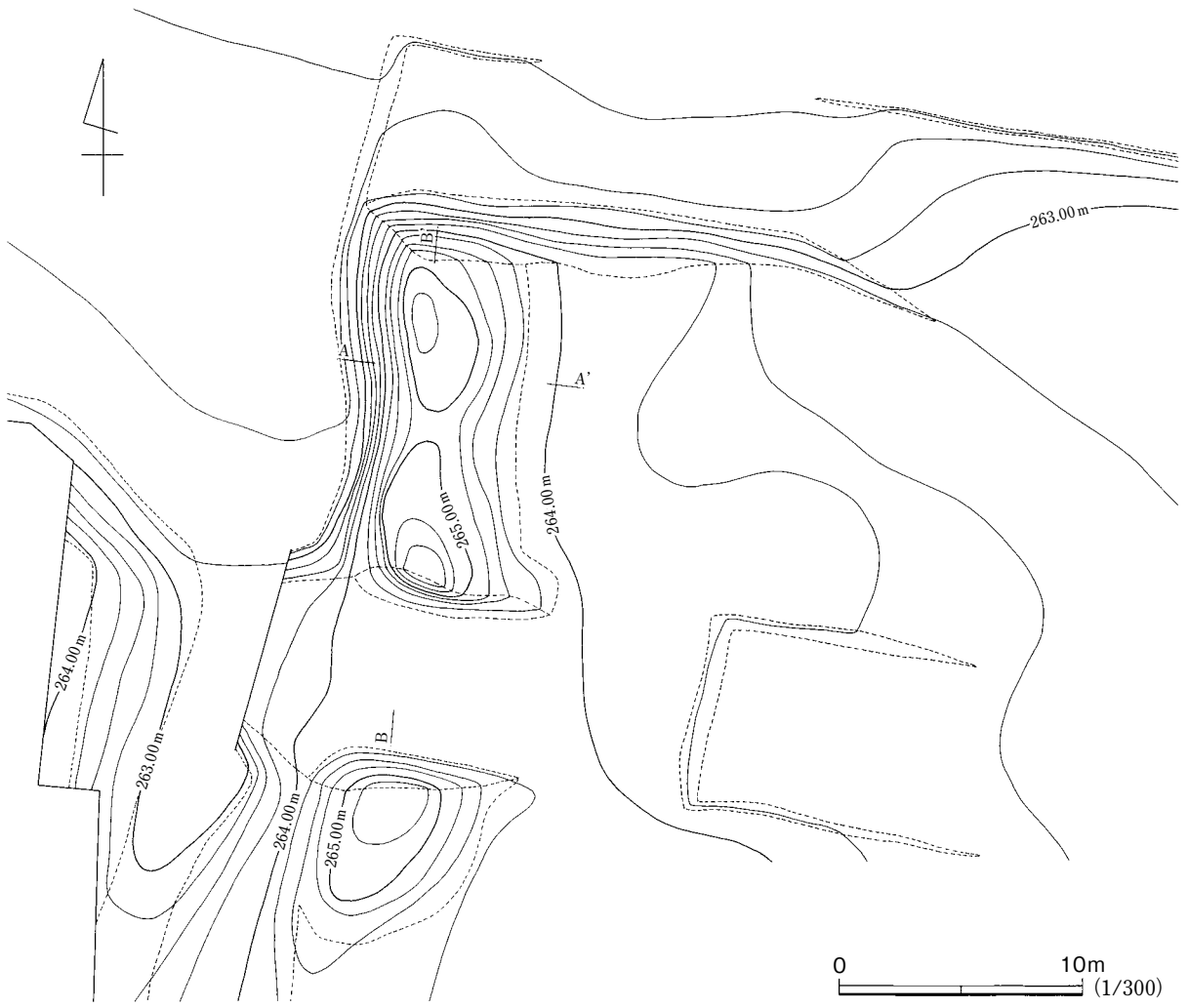
第5図 1～3号竪穴建物小穴(P)断面・1号土坑



第6図 2～6号土坑



第8図 堀・溝



第9図 土塁平面

5. 遺物

第11～14図に示した出土遺物のうち、特徴的なものを遺構ごとに報告する。また、今回の調査を実施する契機となった開発の対象地の南側に隣接する個人住宅敷地内で採集された遺物も併せて紹介する。

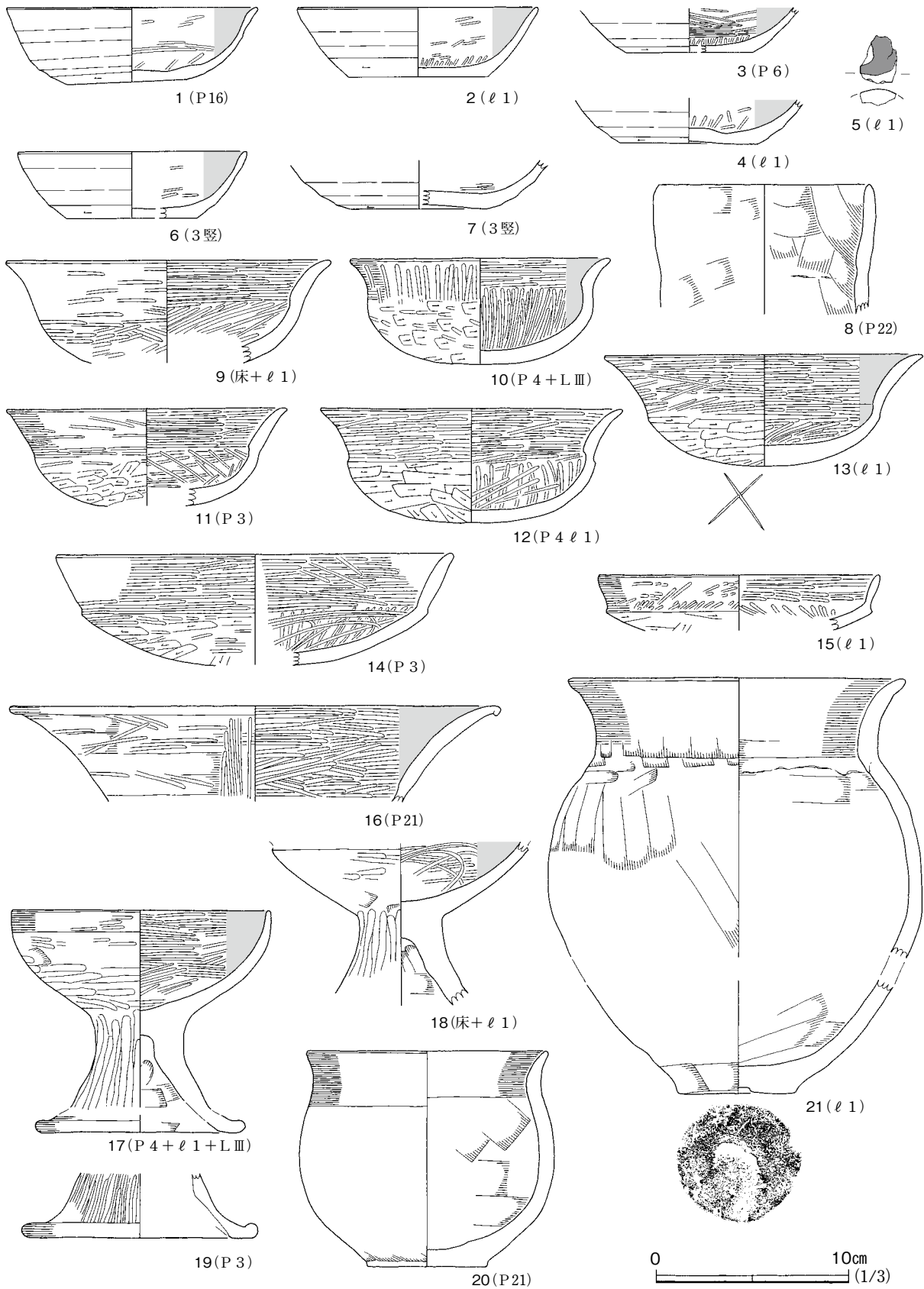
竪穴建物 1～5は2号竪穴建物、6～8は3号竪穴建物、9～31は1号竪穴建物に帰属すると判断した。1～4および6・7のロクロ土師器坏は、底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリされている。5は羽口の細片とみられ、部分的に灰色に還元する。7は再酸化が著しい。9～15の土師器坏は、内外面ともにヘラミガキが顕著であり、10は外面口縁部の縦方向のヘラミガキが特徴的である。13の外面底部には「×」のヘラ記号がある。15は口縁部が直立気味に立ち上がり、体部との境に明瞭な段を形成する。16は大型の坏もしくは高坏とみられる。17～19の土師器高坏もヘラミガキが顕著である。21の土師器甕は口縁部～胴部と底部、22の土師器甕は口縁部と胴部がそれぞれ接合しないが、同一個体と判断した。32～41は、竪穴建物内に混入・流入したとみられる遺物である。32～34は土師器壺の口縁部破片で、32には棒状浮文の装飾が施され、33・34は細かいハケメの調整が特徴的である。35は台付甕の脚部で、内外面ともにハケメの調整がみられる。36の土師器甕は頸部が「く」の字状に屈曲し、外面胴部の調整は太いハケメである。37は上げ底風になる土師器甕の底部である。38～40は弥生土器である。38・39には平行沈線による重山形文や渦巻文が描かれる。40は口唇部に鋸歯状の装飾が施され、口縁部に横方向の2本の沈線と磨消縄文がみられる。41は縄文土器である。胎土に繊維を含み、内面に条痕文、外面に縄文が施される。

土坑 42・43は2号土坑、44～48は3号土坑、49・50は4号土坑から出土した。42の土師器高坏は口縁部と体部に段を形成し、内外面ともヘラミガキが顕著である。43の土師器壺は外面口縁部に縦方向にヘラミガキが施される。44の土師器高坏は外面の口縁部と体部の境に段を形成する。46の土師器甕は胴部が長く伸びるのが特徴で、外面の口縁部と胴部の境に段を形成する。外面の胴部上半には弱いハケメが認められる。47は羽口である。部分的に灰色に還元する。49の土師器甕は成形にロクロを使用し、口唇部は摘まみ上げるように仕上げられている。

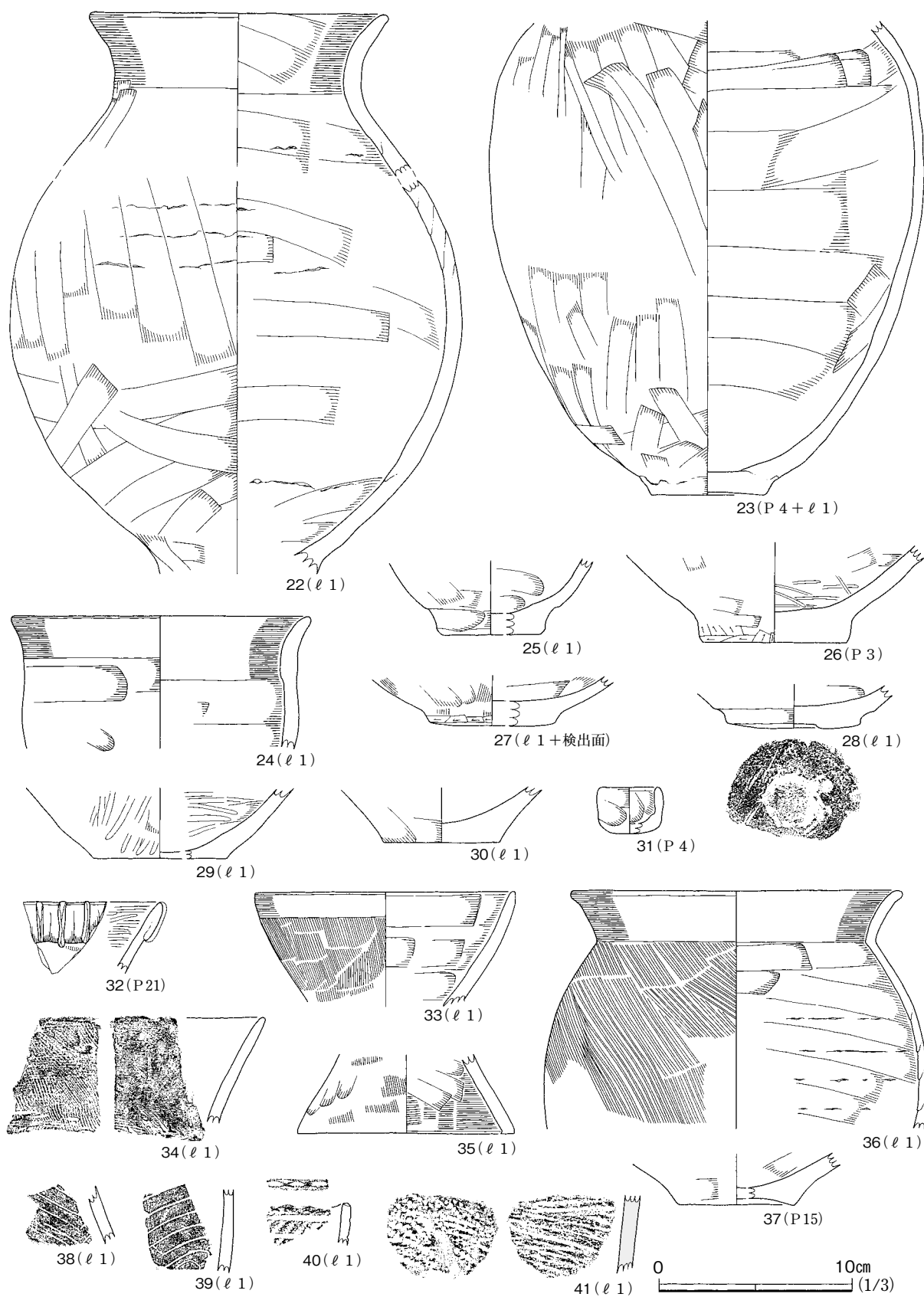
土壘 51の茶臼は、土壘上部の表土から出土した。黒味の強い色調で、石質は安山岩とみられる。52は土壘の積土から出土した。形状から草食動物の臼歯とみられ、大きさから馬と判断した。5点とも同じ場所からまとまって出土しており、同一個体に帰属すると思われる。4点は歯冠の頂部摩耗が著しいが、1点はほとんど摩耗が認められない。

遺構外 53のロクロ土師器坏は胎土に金雲母の顕著な混入があり、口唇部を鋸歯状に打ち欠く。55のロクロ土師器坏は再酸化が著しく、内面に漆膜が付着する。56の須恵器壺は大戸窯の製品であろう。61の土師器甕は頸部が「く」の字状に屈曲する。口縁部～頸部の赤変は、再酸化によるか赤彩かは判断できなかった。62は平行沈線文の施された弥生土器である。63～66は胎土に繊維が混入する縄文土器で、条痕文が顕著である。63の口唇部と外面口縁部には絡条体圧痕がみられる。67の石鏃は頁岩製であろう。

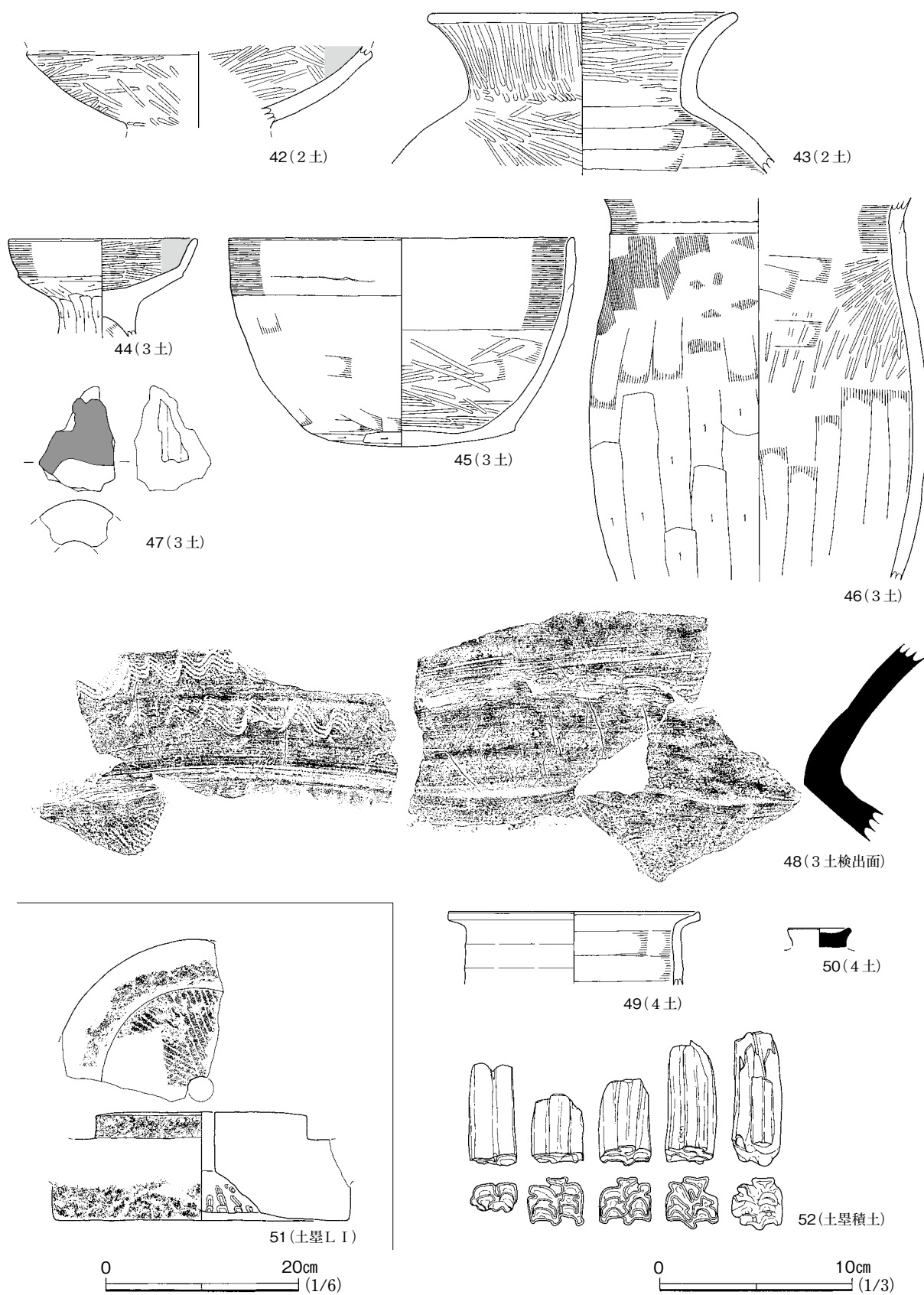
隣地採集 平成26年頃、南側に隣接する敷地で駐車場を整備する際、68の土師器の器台が採集された。脚部の破片で、穿孔・丸窓は小さく、外面の調整はヘラミガキである。



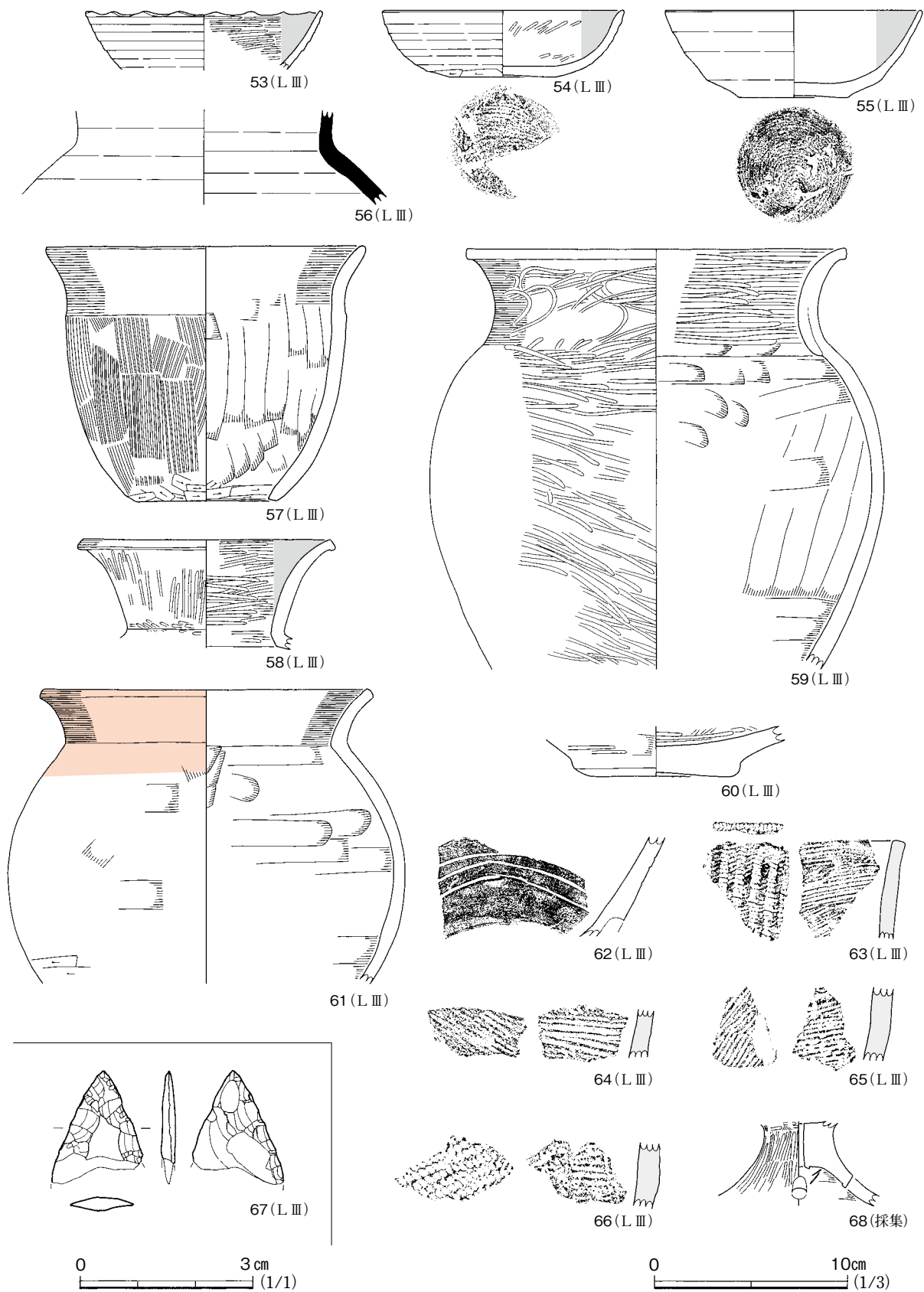
第11図 豎穴建物出土遺物 (1~21)



第12図 竪穴建物出土遺物 (22~41)



第13図 土坑・土壘出土遺物 (42~52)



第14図 遺構外出土・採集遺物 (53~68)

6. まとめ

今回実施した第4次調査では、古墳時代から江戸時代以降の遺構がみつき、縄文時代から戦国時代～近世初頭の遺物が出土した。最後に、調査の成果を時代の古い順に整理する。

縄文時代 少量ながら、縄文早期末葉の土器が出土した。確かな遺構は未確認ながら、沼沢パミスが堆積土に混入する5号土坑は当該期の可能性がある。第1次調査では同時期の竪穴建物が1棟みつかり、周辺の地形などを勘案すれば、第4次調査区のあたりが集落の縁辺であったと想定できる。

弥生時代 少量ながら、弥生中期を中心とした時代の土器が出土した。既往の調査でも遺構は未発見だが、調査区のあたりは集落域の一部であったと思われる。

古墳時代 第4次調査で最も多くの遺物が出土し、竪穴建物1棟と土坑2基を確認した。遺物の大半は古墳後期で、遺構も同時期とみられる。ただし、出土した土器の様相は同一ではなく、1号竪穴建物は後期前半、3号土坑はこれより後出的な特徴を示す。第1次・第2次調査では、古墳中期から後期の竪穴建物がみつかり、今回の調査では古墳前期の土器が一定量出土し、南隣接地でも採集されている。まだ遺構は未発見だが、付近に前期の竪穴建物が存在した可能性は高い。大槻城跡（城の内遺跡）の古墳時代集落は、継続する期間が長く規模の大きい拠点的な集落であったと予想できる。

平安時代 古墳時代に次いで多くの遺物が出土した。不確定なものを含むが、平安前期の竪穴建物が2棟みつかった。このうち2号竪穴建物には2基の炉が設けられ、羽口の細片と少量の鉄滓が出土した。鍛冶を行なった施設とみられる。遺構外からは、やや後出する様相を持つ土器が出土した。

戦国時代～近世初頭 第4次調査区のある地点は、大槻城を構成する曲輪のうち、城下を囲い込んだとみられる区画の北西コーナー付近に当たり、調査前の時点で部分的に土塁が残存していた。調査では、曲輪の北辺を画する堀の一部がみつかった。出土遺物が茶臼1点のみのため、曲輪の機能した時期は明確にできないものの、城下曲輪という想定が正しければ戦国時代～近世初頭であろう。文献史料にみられる政治状況などを勘案すれば、大槻城を蘆名氏が運用した時期と大槻城が蒲生氏の支城として取り立てられた時期の両方、もしくは後者の時期に機能したと考えられる。

江戸時代以降 ピットとした遺構のうち、柱穴とみられるものの多くが当該期と思われる。土塁が削平された部分でみつかった東西に並ぶ1号～4号ピットは、大槻城が城館としての機能を失った後、屋敷地の区画として設置された柵もしくは塀の痕跡であろう。調査前から調査地点内に置かれていた石祠などの石造物には、文化10年（1813）・天保11年（1840）・嘉永5年（1852）・安政7年（1860）の年紀がある。

参考文献

垣内和孝「中世安積郡と伊東氏・相楽氏」同『室町期南奥の政治秩序と抗争』岩田書院 平成18年
郡山市・大槻町合併55年記念事業実行委員会編・発行『大槻町の歴史』平成21年

高松俊雄編『大槻城跡Ⅰ 城の内遺跡第1次～第3次調査概報』郡山市教育委員会 昭和58年



第4次調査区と主郭(本丸)の関係



第4次調査区



第4次調査区主要部



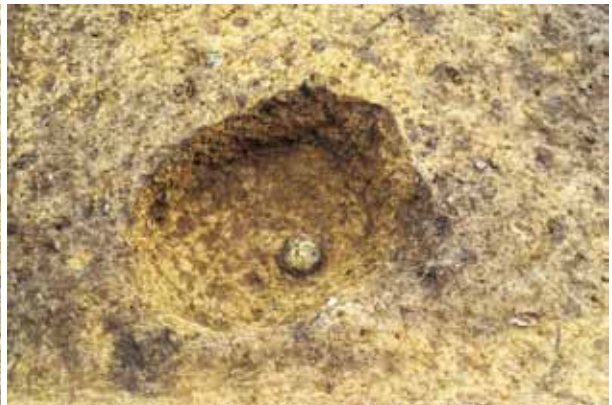
1～3号竪穴建物周辺



1号竪穴建物遺物出土状況(13)



1号竪穴建物P 4 遺物出土状況(12・17・23)



1号竪穴建物P 1



2号竪穴建物P 16遺物出土状況(1)



2号竪穴建物P 19平石出土状況



2号竪穴建物炉 1 断面



2号竪穴建物炉 2 断面



1号土坑



2号土坑



3号土坑



4号土坑



5号土坑



6号土坑



1号溝



1号堀



南東から見た伐採前の土壘



南東から見た伐採後の土壘



北東から見た伐採後の土壘



北から見た伐採後の土壘



土壘南北断面と曲輪北側造成層断面



土壘東西断面



土壘規模人物比較



豎穴建物出土遺物（1～21）



豎穴建物出土遺物 (22~41)



豎穴建物出土遺物 (42~52)



豎穴建物出土遺物 (53~68)

報告書抄録

書名	店舗建築に伴う埋蔵文化財発掘調査業務 大槻城跡（城の内遺跡） 第4次発掘調査報告書							
編著者	垣内和孝 荒木麻衣							
編集機関	公益財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センター							
所在地	福島県郡山市喜久田町堀之内字畑田23番							
発行機関	郡山市教育委員会							
所在地	福島県郡山市朝日一丁目23番7号							
発行年月日	令和5年(2023)5月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大槻城跡 (第4次)	福島県郡山市大槻町字殿町	2036	0320	37° 23' 28"	140° 19' 7"	20230104 ～ 20230215	235	店舗建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大槻城跡 (第4次)		縄文早期	土坑	縄文土器・石鏃				
	集落	古墳後期・平安	竪穴建物・土坑	土師器・須恵器・羽口				
	城館	戦国～近世初頭	堀・溝・土塁	茶臼・馬臼歯				
要約	古墳時代後期と平安時代の集落、戦国時代～近世初頭の大槻城城下曲輪を調査。							

店舗建築に伴う埋蔵文化財発掘調査業務

大槻城跡（城の内遺跡）

——第4次発掘調査報告書——

令和5年(2023)5月31日

編集 公益財団法人郡山市文化・学び振興公社
文化財調査研究センター
〒963-0541 福島県郡山市喜久田町堀之内字畑田23番

発行 郡山市教育委員会
〒963-8601 福島県郡山市朝日一丁目23番7号

印刷 株式会社坂本印刷所
〒963-0551 福島県郡山市喜久田町菖蒲池14-26